The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	J. エドワーズの「超自然的人間」
Author(s)	梅垣, 清
Citation	Osaka Literary Review. 1963, 2, p. 30-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

J．エドワーズの「超自然的人間」

梅　垣　　清

主としてエマソンの，そして一般に超絶主義者達(Transcendentalists)の業績を「最も新しい型の無信仰」であると弾劾したユニテリアンのA・ノートンは奇蹟を信仰の基礎と考えていた．このノートンの思想に対してトランセンデンタリスツが激しい反駁を加えたのは勿論であるが，超絶派に属さない人々も，科学的な見地から，ノートンを攻撃した．功利主義を奉ずるR・ヒルドレスもそのような人々の中の一人であり，『A・ノートンへの手紙（1840）』の中で彼を批判した．扨その手紙の中に次のような文章がある．キリスト教の殆んどの宗派が，神に関する真理は「神の力の特別な働きにより奇蹟的な方法で個々の魂に伝えられる」とこれまで信じてきたし，今もそう信じている，と述べた後，彼は続けて言う．

> 新しい学派の神学者達（トランセンデンタリスツのこと）には神の特別な干渉など不要である．特別な場合の特殊な奇蹟は不必要なのである．彼らは，神の真理（divine truth）を知覚できる原因を悟性とは全然別個でありそれよりも上位に属する人間精神の固有の能力に帰する．疑いなく神に由来したものであり，直接的に神に従属してはいるけれども，他の精神の諸能力と同様一つの人間の能力には違いないような能力に帰するのである．[1]

このヒルドレスの言葉はトランセンデンタリスツと彼ら以前の人々との間にある大きな懸隔，人間の能力，偉大さに関する見解の明確なる相違を適切に約言している．一方は，「神の力の特別な働き」がなければ，神に関する真理，即ち神を知覚したり認識することはできない．他方は，持って生れた能力を活用すれば，簡単にそれができそうである．前者は神と人間との間に介在する大きな距離を認めているが，後者は，神と同様の能力

を有しているのであるから，前者に存在する神と人間間の距離はなくなる．

ヒルドレスが上の文章の中で「新しい学派」と比較して念頭においているのは，「殆んどの宗派」とはいっても，矢張り勿論奇蹟を信ずるユニテリアン達であろう．成程ユニテリアニズムは，例えば，カルヴィニズムなどとは違って，新しい考え方を持つ宗派には違いない．エマソン自身も断言している通り，トランセンデンタリスツもある程度迄はユニテリアンなのだ．しかし「奇蹟」や「神の特別な働き」を認める点では伝統的なカルヴィニズムと変らない．要するにユニテリアニズムとは曖昧な存在なのだ．従って，上のヒルドレスの言葉は伝統的なカルヴィニズムと新しいトランセンデンタリズムの間に存在する人間性 (human nature) に対する見解の相違を述べたものであると考えることもできるであろう．

ヒルドレス以後，広く一般に，カルヴィニズムの思想や文学とトランセンデンタリズムのそれとを峻別するものとして，両派のこの人間観が先ず注目され，強調されてきた．そして，例えば，エマソンは「無限の可能性を持った人間 (immense possibilities of man[2]) 」を謳歌したのであり，一方エドワーズは「人間性の全面的腐敗，堕落を説くカルヴィニズムの教義 (the Calvinistic doctrine of the total depravity and corruption of man's nature[3]) 」を心から信じ，人間を弱小視した，と一般には考えられてきた．このような説明を聞けば，従って，誰しもこの二人の間には完全な断絶以外の何物もないと考えざるを得なくなる．そして，この説明だけから判断すれば，そう考えることは間違っていないように思われる．

我々にこのような断絶を感じさせる理由は，我々があまりにヒルドレス流の考え方にこだわり過ぎるからであると思う．確かに，彼は新旧両派の相違をずばりと約言してはいる．しかし，それはあくまで，唯理論上考えられる相違である．実質的な見地から眺めた場合，彼ら二人の間には果して大きな隔りがみられるであろうか．「神の力の特別な働き」であると彼が考えたものにたすけられたエドワーズの人間と「固有の能力」であると彼が考えたものを持つエマソンの人間との間には，それぞれの人間が成し得た最高のものを考えた場合，果して越えられぬ割れ目があるであろうか．

エマソンを研究する場合，カルヴィニズムを，かなり多くの批評家がす

るように誹謗的に扱うのではなしに，その功績を率直に認めた上で，それがエマソンに与えた影響を考えてみようとする学者達もある．彼らの一人であるP・ミラーは，彼の論文「エドワーズとエマソン（'From Edwards to Emerson'[4]）」において，主として両者の自然観に触れながら，この二人の間には我々が信じ易い程の開きがあるとは思えないという卓見を吐いている．彼は，一人がカルヴィニストであり今一人は系統的神学（systematic theology）を受入れなかったという事実にはあまり拘泥しない．

外面的な事実は，成程重要かもしれない．それは，しばしば，より重要なもの，内に含まれている本質的なものを暗示する．しかし，勿論，あまりにそれに執着すると浅薄な見方が生れることも亦事実である．一般にカルヴィニストとして知られているエドワーズとトランセンデンタリストとして知られるエマソンの間には，時代，環境，資質等に由来する多くの相違が認められるであろう．後者は，前者のものと比較した場合，より広く且つ進んだ考えを持っているかもしれない．そしてこれを調べることこそ最も重要であろう．しかしこの場合にも，実質的なものには目を閉し，外面的事実にのみ立脚したものであってはならないのは勿論である．

エマソンが語ると，たとえそれが実質的には彼以前のアメリカ人によって言われたことであっても，特別に新しいことであるかのように考えられてしまうことが多い．彼が語る思想は，それがたとえ無意識的にであれアメリカ人の先祖から受け継がれた場合でも，先ずヨーロッパと結びつけられてしまう傾向がある．別にエマソンの独創的な偉業や彼とヨーロッパとの関係を不当に少く評価しようというのでは毛頭ない．同じアメリカの思想家のことをも今少し考えてみる必要があるのではないか，というだけのことだ．既に述べた人間の可能性という問題一つを取り上げてみても，少し広い見方をして実質的な面に注目すると，エマソンをはじめトランセンデンタリスツが揚揚と主張したことは，必ずしも，全く彼らの先祖達により触れられなかったことであるとは断言できないと思われる．彼らの先祖の中で代表的な存在であり，罪深い小さな人間と大きい神との間にある遠大な距離を始終口にしたエドワーズにおいて，では一体人間は究極的にどの程度に迄達し得たのか．

人間性には本来神と同様の性質，能力が備わっていることをトランセン

デンタリスツに教えたのは，エマソンが「アメリカの教会の花形」と呼び尊敬していたユニテリアンのW・E・チャニングであった．彼はユニテリアンとはいってもトランセンデンタリストに大変近い．彼は「人間であることを止めなくとも神との類似性は保てる」と主張する程人間性を尊重していた．彼は説く．

> 人間の高次で精神的な本性は神との類似性を持つ．この類似性は人間の精神に最初から本質的に備わっている能力に基づいている．…この類似性は特別に奇蹟的に与えられたり，超自然的に魂に附加されるものではない．[5]

この類似性を証明するものとして，彼は，無限の神というイメージはそもそも人間が作り出したものではないか，かりに人間が神の性格を持たなかったらそんなイメージは浮かばぬ筈だ，という理論を持ち出す．（この理窟からすると，面白いことに，ユニテリアンは神の偉大さ，完全さをなにかにつけて強調したカルヴィニストを大いに尊敬せねばならなくなる．神の全能の姿を想像できるのは人間が全能であることを間接的に示しているのだから．）

このように堂々と神と人間の類似性を述べた文章は成程エドワーズには発見できない．しかし同様なことを彼は，控目にではあるが，確かに言っている．「神は人間に自らの姿を刻印し，人間を彼の神々しさに与らせる[6]」という彼の言葉はあまりに一般的な考え方で特にここに引くに値しないかも知れない．彼は，しかしまた，人間の心の中にはそれが神聖なるものに対して働くのを妨げ且つそれを盲目にする本性があることに注意を促しながらも，「人間は神の存在を推論する能力を与えられている[7]」とはっきり述べることにより人間が本来神を知る力を所有していることを示す．今一例，より一層具体的なものを挙げよう．「神の性格（the nature of the deity）」と「人間の精神（created spirits）」との違いに関して誤った意見が伝えられていると注意した後，彼は自説を述べる．

> 今仮に人間の精神が無限に拡大されると考えてみよう．そうすれば，そっくりそのまま神ができ上るのだ．神と同様に純で不変なものが

生れるであろう.[8]

この文章は,両者は質的にではなく,唯量的に異るものであることを示している. 勿論, 量的にとはいっても, 「無限に拡大される」という表現に問題が残るかもしれない. しかしこれを次の表現と比較した場合, この「無限に (infinitely) 」という言葉にそうこだわることはないと言えるかもしれない. トランセンデンタリスツには, 「主」としてではなく, 「兄弟」として考えられた[9]キリストの偉大さを述べたT・パーカーの言葉である.

> キリストを我々人間の中の最高の者達と比較してみよ. 最高の人間達といえども彼の前では何と小さく劣ってみえることだろう. 我々がイエスをできる限り高めてみても, 多分それでもまだ足りない (程彼は高い存在なのだ) . それにもかかわらず矢張り彼は我々の兄弟ではなかったか. 我々同様人の子ではなかったか.[10]

「兄弟」の間にさえこれ程量的な開きが見られる. 「兄弟」と呼んだところは確かに新しいし, それだけイエスが人間にとって近づき易い存在になっているのは事実であろうけれども.

上に紹介したエドワーズの意見は, 「神の力の特別な働き」を受けていない人間, つまり「生れながらの(natural, unregenerate)」人間の状態に関して述べられたものである. それらの意見は, トランセンデンタリスツのものと似てはいるが, 力強さという点では遙かに劣るようである. それに, この自然の状態にいる人間に関しては, エドワーズは, 偉大さとか神との類似性という観点からよりも, むしろ無力さ罪深さという観点から眺める方が多い. 従って, 話をエドワーズの所謂自然の状態にいる人間のみに限ってしまえば, 人間の能力つまり人間性をエドワーズはエマソン達がする程には大きく評価しないと言えるかもしれない. そして, もしエドワーズが, 人間は生涯を通じて自然の状態でしかあり得ない, と考えていたとすればその時初めて我々はなんの躊躇もなく, カルヴィニストであったエドワーズはエマソンがしたようには公然と人間性を高く評価できなかった, と言えるかもしれない.

ところがエドワーズは，人間は「超自然的（supernatural）」になり精神的に生れ変った状態（regenerate）になれるということをも亦主張し続けたのであった．これには「神の力の特別な働き」が必要なのである．「特別な力」とは，エドワーズにおいては，「聖霊（the Spirit of God）」である．その接近やそれが残した結果は認められても，それが「何処から来て何処に去るのかということは分らない[11]」聖霊であり，「神により人間の魂に直接与えられる，自然のままの人間が獲得するどのようなものとも異った性格を持つ霊的で聖なる光[12]」としてのあの聖霊である．

エドワーズは，認識の方法に「頭脳（head）」，つまり悟性によるものと「心（heart）」，即ち唯単に悟性だけでなくそこに意志及びそれが嵩じたものである（と彼が考える）感情が含まれたものによるものとの二種がある，と固く信じていた．そしてその対象が何であれ後者による認識の方が前者によるそれよりも遙かにより対象の本質に迫るが，特に，例えば宗教の如く，その対象が精神的なもの，魂に関係したものである場合には，後者による認識以外は考えられぬと主張した．従って，彼の所謂「聖霊」が働きかけるのは，正しく，この「心」に対してなのである．

聖霊が人間の魂に対して働きかける時，エドワーズによれば，二つの場合がある．一つは聖霊の光が唯外部から魂を照らすだけで内部にまで入り込まない場合である．これをエドワーズは「普通の作用（the common influence）」と呼ぶ．この作用だけでは人間は超自然的にはなれない．これは人を超自然的にする今一つの作用の言わば前段階とも考えられる作用であり，自然のままの段階にいる人間の小ささや神の強大さを人に感知させる働きをする．これに対して，人間を超自然的存在にする方は「特別の作用（the special influence）」[13]と呼ばれる．この場合には，聖霊は唯外部から魂を照らすのみではなく，

> その（＝聖霊の）相応しい，永遠の住処として聖者の霊の中に住み，生れ変った人間性の動因として，あるいは聖なる超自然的な生命や行動の源として聖者の心に影響を与える[14]．

この聖霊の「特別の作用」によって，「自然の状態にいる人間の魂の諸機能をいかに高めたり変えたり混ぜ合わせたりしても得られないもの」が心

に植附けられるのであるから，当然，その心はそれ迄に感じたり認識したりできなかったものを感じ，認識する．エドワーズはこのことを絶妙な比喩を用いて次のように説明する．「特別の作用」という光のたすけを借りずに神聖なものを眺める人は

> 最も美しい花が満ちあふれ，この上もなく意匠をこらされた庭へ暗闇の時に入って行き，その美しさを知覚しようとして，庭にある一つ一つのものを，手探りをしながら，比較していく人にも似ている．一方この聖霊の光によって眺める人は日の光がその庭の上に輝いている時にそれを見る人に似ている．[15]

庭の調和美そのものは常に存在している．暗闇の場合はただそれが目に映らないだけなのである．上の例が示す通り，人間は，超自然的になることにより，存在はしていたが気附かなかった真理に目覚める．聖書の語句解釈という卑近な一例を考えてみても，エドワーズが「私記（'Personal Narrative'）」の中で告白している通り，以前には何の感動も受けずむしろ厭わしくさえ思っていた語句から「以前に経験したものとは全く異ったものを感じ」，その語句を正しく解釈し鑑賞することが可能になる．要するに万有が新しく見え，そこに隠されていた神の言葉，法則が明瞭になってくる．

今一度エドワーズに最高の段階に昇った人間を描いてもらおう．聖霊が人間の魂の中に住みつき，そこで生命と行動の源になることにより生ずるものは結局この「神性」なのである．

> それはこれ迄人間が持たなかった新しい性である．神性（divine nature）である．魂の性質がこのように一変すると，魂は自由に神の光を受け入れるようになる．聖なるものが，今では，卓絶した，美わしい，そして燦然たるものに見えるようになる．以前はそうではなかった．……この神性を帯びた気質は，まことに，霊的な把握（spiritual understanding）において，……つまり神聖なるものに対して心が持つ観念において，その最初の活動を開始する．[16]

この活動が強烈になる場合,「人間の心は真理と虚偽の区別さえできるようになる.」上に引用した文章が示す通り，エドワーズは，たとえ「神の力の特別な働き」にたすけられてであれ，人間が神性を所有できることを，殆んど神にまで高められることをはっきり認めているのである.

我々が，一見して，エドワーズの人間観とエマソンのそれとの間には大きな開きがあると考え易い今一つの大きな理由は，彼ら二人が使用した用語の違いと関係しているように思われる．エドワーズの伝記作者であるウィンズロー (Ola Elizabeth Winslow) は，エドワーズもエマソンも共に宗教の本質を探り当てたが，一方はそれを死んだ慣用語の殻の中に閉込め他方は全く神学的でない言葉でそれを表現した，と述べている．この伝記作者はさらに続けて，もしエドワーズがカルヴィニズムの言葉を使わず自分自身の言葉で語っていたら，アメリカの宗教史，文化史は大いに変ったものになっただろう，と指摘する.[17] その通りであろうとは思われる．しかし，だからといってその古い表現の中に隠されている新しい内容，(‘新しい’と言うことに問題があるとすれば) いつの時代にも通用する内容までが古いと簡単に無視されてはならない．当時の，そして勿論現代の多くの人々にとって，実際，エドワーズの使った「聖霊」という言葉は全く古色蒼然たるものであり，聞き飽きた言葉であろう．そのような人々にとって，例えば，「大霊 (Over-Soul)」とか「道徳心 (moral sentiment)」[18] といった言葉は新鮮な響きを与える．事実新鮮には違いないが，過度にそう感じられてはいないだろうか．所謂浪漫主義の詩によく使われる「風 (breeze, wind, breath, etc.)」のもつ重要な意味を指摘し，エマソンの「大霊」もこの「風」の一種だと説明した後，これらは大古からある思想であり，キリスト教に於ても，神が人間の鼻孔に吹き込んだ生命の息吹という形で存在していたと考える M・H・アブラムズにも，我々は耳を傾けなければならない．(‘The Correspondent Breeze ; A Romantic Metaphor’ 参照)

繰返すことになるが，実質的には，エドワーズもエマソンも共に人間が神性を所有し得ることを認めていた．妙な表現をするが，この「神性」を仮に人間の最大値と考えてみよう．エドワーズの所謂罪深い小さい人間は，従って，人間の最小値ということになる．我々がエドワーズとエマソ

ンを比較する場合，前者は最小値しかみることができなかったのに対して後者は最大値を示し人間性の高揚に貢献した，と結論してしまう傾向がある．これは少し性急すぎないだろうか．共に最大値をはっきり示しているのであるから．二人の差異はむしろ人々を彼らの最大値にまで高めようとするその方法にあるという気がしてならない．エドワーズは，人々にむしろ最小値を強調することにより，そんな段階を脱け出して最大値に達したいという気持を起こさせた．一方エマソンは，こんなエドワーズとは逆に，むしろ最初から大胆に最大値を提示することによって，人々を刺激してそれに向かわせたように思える．

「（信仰は瞬間的にやつて来るが）罪業は不断である[19]」，「世界は，無知な人間と罪深い人間にとっては，（流動的（plastic）であることを止め）石の如く堅く冷酷無情である[20]」，「（人間は善なるもの，完全なるものが持てるように生れついている．）現在のところは悪と弱さの中にいて賤しい存在であるけれども[21]」，「自我とは‘悪魔’を意味する（と同時に‘神’をも意味する[22]）」——これらはエマソンが，偉大な人間を讃美する合間に，時折触れた所謂最小値の数例である．エマソンがあれ程人間の偉大さとか，「人間の隠れた力に対する信頼（confidence in the unsearched might of man[23]）」を説いたのは，一つには人間の眠っている「理性（Reason）」を目覚ませる為であった．これは，エドワーズ流に言えば，自然のままの人間を超自然にしようとすることと実質的には大差のないことではないだろうか．そしてエマソンの場合にも，「理性」が目覚める為には，「自分の意志と呼べるものより一段高い起原（a higher origin … than the will I call mine[24]）」のたすけが必要なのである．エドワーズが「何処から来るのか分らない聖霊」を待つのと殆んど同じように，エマソンも結局は，一段と高い起原から来るものを待たねばならない．自らも言う通り，「待っている予言者[25]」である．

私は過度にエドワーズとエマソンを結び附けようとしたと批判されるかもしれない．両者の違いは述べず類似した点だけを述べるのは片手落も甚だしいと言われるかもしれない．全くその通りであることは充分承知している．私の意図したことは，唯，両者の用語や方法の違い（これらも勿論決して無視さるべきものではないが）がすぐそのまま実質的，根本的なも

のの違いであると見做されてきた従来の圧倒的傾向に少しでも均衡を回復させたいということであった.

〔注〕

① *The Transcendentalists* edit. by P. Miller (Harvard) pp. 223～4

② 'The Over-Soul'

③ *Freedom of the Will* (Yale) p. 432

④ Perry Miller : *Errand into the Wilderness* (Harvard) pp. 184～203

⑤ 'Likeness to God' *Transcendentalists* p. 22, p. 25

⑥ *Sermon Outlines* (Eerdman) p. 26

⑦ *Ibidem* p. 54

⑧ *The Philosophy of Edwards* edit. by H. G. Townsend (Oregon) p. 183

⑨ *The Journals of R. W. E.* 1838, 3, 5

⑩ 'Discourse of the Transient and Permanent' *Transcendentalists* p. 275

⑪ *Religious Affections* (Yale) p. 161

⑫ 'a Divine and Supernatural Light' *Jonathan Edwards* edit. by C. H. Faust and T. H. Johnson p. 102

⑬ エドワーズは 'special' の他にも 'gracious', 'saving', 'spiritual' 等々の形容詞を使っている. 又 'influence' の代りに 'grace', 'illumination' 等の言葉も使われる.

⑭ *Religious affections* p. 200

⑮ *The Philosophy of J. E.* p. 250

⑯ *Ibidem* p. 249

⑰ O. E. Winslow : *Jonathan Edwards* (Collier Books) p. 150

⑱ 'The Divinity School Address'

⑲ 'The Over-Soul'

⑳ 'The American Scholar'

㉑ 'The Divinity School Address'

㉒ *The Journals of R. W. Emerson*, 1833, 2, 10
㉓ 'The American Scholar'
㉔ 'The Over-Soul'
㉕ *The Journals of R. W. Emerson* 1836, 8, 29